

## 『夢の通ひ路物語』における「序」の意義

—阿闍梨の生い立ちに関わる記事を中心に—

安 道 百合子

### はじめに

『夢の通ひ路物語』は、冒頭に近いところに阿闍梨が夢の中で巻物を受け取るという場面が描かれ、本筋の物語はその巻物の中に記されていたこと、という構成で進行する。この特異な構成は早くから注目されている。大槻修氏は、その起筆法を「新しい発明」として高く評価され、あわせて「序のこの部分に呼応する場面が巻六に用意されている」ことについても、「首尾照応した構成」と注目された。物語の冒頭から巻物の内容に入るまでの部分を、従来は「序にあたる部分」とか「序相当部」と呼びならわし、概ね「夢に巻物を託される」という設定の目新しさを肯定的に評価しているようである。しかし、その部分に書かれているのは、実は、阿闍梨が夢を見るという場面だけではない。

この部分は、作品の冒頭八丁ほどの分量を占め、その後の話は丁を改めて記されている。形式的にも、独立した体裁をとっているが、『序』と明記されているわけではない。王朝物語の冒頭部分を『序』と呼ぶ例も他に見当たらず、またいわゆる『序文』と区別するためにも、本稿では「」をつけて「序」と呼び稿を進めることにする。さて、「序」の記事は、実際には阿闍梨の生い立ちに関わる記事がかなりの量を占める。が、先行研究においてはそれについての言及はほとんどない。そして「序」の意義についても、これまではつきりとその説明がなされてはいないのである。本稿では、阿闍梨の生い立ちに関わる記事を中心に検討し、「序」の記事の内容全体が物語のプロローグとしての機能を担っていることを確認したい。なお、「序」の意義については、既に、塩田公子氏が、年立考察の視点から積極的にその意義を認めようとしており、大いに従えるも

のであるが、ここでは塩田氏とは違う立場から「序」の意義を考察しようとするものである。

## 一 「序」の内容

まずは「序」の記事の内容を詳しく読むことから始めたい。既に述べたように、「序」には、夢の記事の前に、阿闍梨の生い立ちに関わる記事がかなりの筆をついやして書かれている。生い立ちに関わる記事、と一口に言っても、その内実は、(1)阿闍梨の父母の恋愛、(2)阿闍梨の誕生、(3)父母の別離と母の死、(4)阿闍梨の出家志向、(5)出家成就とその後、という五つの部分に分けられる。単純に考えると、阿闍梨に〈巻物を読む〉という役割を与えるだけのためなら、父母の恋愛まで記す必要はないと思われる。

中ごろ、吉野のやまざとに、ふりたるみかどの御さゝぎにつかうまつるひぢりはべりけり。  
(巻一・五)<sup>3)</sup>

冒頭のこの一文のすぐあとに夢の記事を持ってきてもよかつたはずである。しかし、物語は阿闍梨の出生まで詳しく語る。そこには何か意味を認めるべきであろう。

(1) から順にその内容を簡略にまとめておきたい。

### (1) 阿闍梨の父母の恋愛

父は近衛少将である。母は、吉野の里に住んでいた女で、両親を

亡くして心細い思いで住みわびていた。女はもともと身分の低い生まれのため、身につけるべきことを習うでもなし、またそんな頼りも無く、はかなく日々を送っていた。十六歳のころ、少将は花見に吉野を訪れ、その中宿りに女の住む里にきた。女は、慎み深く、雲上人と交際することを恥ずかしく思ったが、気位高くばかりもいられないので少将をもてなす。そのうちに、前世からの因縁であったか、互いに戀ろになっていった。幾日か経ち、少将は都へ帰る時に女と一緒に伴おうと誘ったが、女はついていかなかった。時折、言葉をかけてくれるように頼み、男もまた、行く末までも、と約束して、さまざまの形見を残して帰っていった。その後、手紙などは時々通わせていたが、人目もあるので引き続きは訪れなかった。

### (2) 阿闍梨の誕生

その年の深冬に、吉野の女は男の子を産んだ。都へ知らせると、男は引き取って育てたいと言いが、女は子を手放せず、いますこし大きくなるまではこちらで育てると答えて、月日がたった。

### (3) 父母の別離と母の死

そのうち、京の男の心は他の女に移ってしまった。子が五歳になるころ、女は子を男に託そうとするが、男のほうは、蔵人の娘を妻に迎えてこれも男の子を持っていた。それで、もはや吉野の女との間にできた子を迎える気持もなく、返事もしない。女のほうでは何かと手紙を送るが、ついに返事はないままである。悲しんだ女は病の

床につき、子は熱心に看病したが、その甲斐なくついに亡くなった。  
(4) 阿闍梨の出家志向

子は里人に面倒を見られて、十五歳になった。それで、都に父を尋ねようと思うが、連れて行く人もいない。具体的方策もないままながら、父に逢いたいと思うと同時に、出家して母の菩提を弔いたいと志す。そのうちに「やなぎの宿」の人のついで、その妹が仕える右大臣の若君の乳母を紹介される。

(5) 出家成就とその後

乳母の世話で、子は出家の本意を遂げる。その後、修行に励み、常に大願を立て母の菩提を弔った。そのうち、心は清らかに澄みわたり、何の煩惱に悩まされることもなく、三十年程が過ぎた。

なお、(2)の部分の解釈について一言付け加えておく。本文は次のようになっている。

其としの深冬に、よしのにてはやむ事もあらず、おのこ子をな  
んもたり。さることみやこえもつけおこしつゝ、<sup>a</sup>「もろとも  
にかしづかばや」などいふけれど、これをさへ打はなちてんと  
はさすがにかなしければ、<sup>b</sup>「今すこしわきまえんほどは、こ  
れにても見はべらばや」とかわらぬかあしどもいふて、日ごろ  
へにけり。

(卷一・八)

この部分について、福武書店本は、傍線部 a の会話主を吉野の里

の女、b を近衛少将としている。また、塩田氏の「『夢の通ひ路物語』全訳一」「序」の校訂本文と現代語訳を示す。二以降は未発表<sup>c</sup>も会話主を同様に考えられて次のように訳す。

その年の真冬に、吉野では女は苦しむこともなく、男の子を産んだ。その子の誕生を、都の少将にも知らせてやり、(吉野の女)「ともに大切に育てましょう。」などと言ってやったが、少将としては、この子さえも見捨てて顧みないのはさすがにつらいので、(少将)「もう少しその子が大きくなったら、こちらへ引き取って育てたいので。」と同じような返事ばかり繰り返して、月日が経った。

しかし、この会話主は男女逆ではないかと思う。現在子は女のもとにいたので「これをさへ打はなちてん」の主語は女と考えられる。さらに、もともと男の都への誘いを女が断ったという経緯を考え合わせても、その方がよいであろう。つまり、子どもの誕生を知らされた少将は「一緒に育てよう」と提案したが、女は都へ行く気はない。かと言って腹を痛めた子まで手放すのはしのびない。それで、「もう少し大きくなるまではこちらで育てたいのです」と答えて月日が経った」と解すべきだと考える。そうすると、その後「されば、頼がたき人のこゝろにて〜(そうなる)と頼みがたいのは人の心というもので京の男は心変わりしてしまつた」とある文に、スムーズに続く。

## 二 阿闍梨の役割

次に、物語における阿闍梨の役割に目を向け、その役割と「序」の記事との関係を考えてみたい。

「序」に描かれた阿闍梨の生い立ちの記事とは、彼の出家に至る経緯とも言える。これによって確認できることは、彼が権大納言家の乳母を頼って出家を果たしたことが、出家後はひたすら修行に励んで、若いうちに悟りの境地に達したこと、の二点である。

一方、巻物の中の阿闍梨は終始達観した聖として描かれている。病床の権大納言の夜居を務め、その験の確かさは、一旦息絶えた権大納言が息を吹き返すという場面によってもうかがい知られる。阿闍梨に与えられた三の宮に出生の秘密を告げるといふ役割にひかれて、『源氏物語』の冷泉院に出生の秘密を告げた夜居の僧の面影と重ねられるところはあっても、彼は老人ではない。まだ若いながらに悟りの境地に達した人物なのである。

その彼は幼少時に権大納言と交流していた。

万かくしあへず後／＼はおぼしなりにけり (巻一・一六)

とあるので、かなり親しい仲だったようである。権大納言は阿闍梨の夢にあらわれた時、

君ならでは聞えうけたまはるべきかた、はたおもほへさぶらは

ねば、かふ見せ奉る。

(巻一・一九)

と語る。これは権大納言の信頼のあらわれであろう。そして、阿闍梨は権大納言の最期をみとつたのであった。

「序」は、阿闍梨と権大納言との接点を明らかにし、彼が出生の秘密という大事を告げる役割を担うに足る験ある僧であることを示したもので、とまずは考えられよう。

もう一つ、巻物の中で果たした阿闍梨の大きな役割は、梅壺女御の出家の導師を務めたことである。女御は三の宮を出産してからというもの、その秘密が露見することを恐れて、ついには、見舞いに訪れた甥の三条少将に火取りを投げつけるという狂気の行動に出る。そんな自分を恥じて、すぐれた僧であり、かつ、この秘密を漏らすことのない人物として阿闍梨を選び、出家を遂げる。

つまり、阿闍梨は、巻物において、三の宮の両親二人に関わっているわけである。権大納言の臨終に立ち会い、女御を出家させた彼の役割は、三の宮の両親二人の俗世の終焉を見届けることだった、とも言い換えることができる。

さらに巻物を読み終えた阿闍梨の役割は、まずは三の宮に真実を告げることであるが、それだけではない。巻物を読み終えた三の宮は、出家を志す。

「三ノ宮」「此阿ざ梨もさる道よりぞ、かくはなりぬとや。丸もことつけて物うきよをやそむかまし」と思す。

(巻六・七八六)

阿闍梨に学んで父を弔おうと考えたのである。けれども、権大納言の夢告は我が子への愛情に根ざしたもので、子を出家させようという思いはなかつた。阿闍梨は三の宮に出家を思いとどまらせなければならぬ。そこで彼の説得が描かれる。

「御断に侍ど、げに左様にても、おふけなくいかめしき御有様にても、のし給る名残、心清くよの人もえおもひしづまり侍でおのづから御心の外なる乱などいでき侍ば、必、仏などもにくみ御覽すべければ、何事もよにまかせ、時いたるべきをこそ侍せ給ぬべけれ。」〔以下略〕

(巻六・七九〇)

阿闍梨は三の宮の志に対し、もつともだと理解を示しながらも、皇子という重い立場で急に出家するという大事について、世の人も納得しないだろうし、思いもかけない政治的な乱れも出てくることになっては仏のにくむところである、などと説得する。

そもそも、阿闍梨が出家したのは母を弔うためであった。親を弔うために出家を果たすという彼の孝養の精神を描くためには、両親が別れ母が死ぬ経緯を示す必要があつたであらう。その阿闍梨は、三の宮の心情をよく理解できる立場にあつたのである。が、三の宮は皇子であり、阿闍梨とは立場が大きく異なる。また、阿闍梨には与えられることのなかつた父親の愛情が、三の宮にはあつた。そんな三の宮に、簡単に出家を遂げさせてはならない、その説得をするには、三の宮の苦しい胸の内を十分汲み取ってやったりえで、懇々

と説き諭すことが必要である。それには、同じことを考えて出家を果たした阿闍梨がもつともふさわしい人物だったと考えられる。

阿闍梨は、巻物を読むという傍観者の役割を負うのみならず、積極的に権大納言父子に関わらざるを得ない。それにふさわしい人物であることを、作者は「序」によって、読者に納得させようとしているのである。

### 三 「吉野」で「ふりたる帝の御陵」に仕える設定の意義

ここで、改めて物語冒頭の一文に目を向けてみると、そこに記された阿闍梨の設定にも、その意義を認めることができるように思う。再度の引用になるが、この物語は次のような阿闍梨の紹介で始まっている。

中ごろ、吉野のやまざとに、ふりたるみかどの御さゝぎにつかうまつるひぢりはべりけり

(巻一・五)

阿闍梨は「吉野」に住み、「ふりたるみかどの御さゝぎ」に仕えていた。さりげなく書かれているが、この「吉野」と「ふりたるみかどの御さゝぎ」とは重要な設定である。

阿闍梨はなぜ吉野に住んでいたのか。阿闍梨の母が吉野の女であることは繰り返し述べてきた通りである。彼は、十五歳の時に上京して出家を果たした。一旦、都へ出てきた彼がなぜまた吉野へ戻ったのか。母の菩提を弔う、という出家の目的を考え合わせると、お

そらく母の住んだ土地で母を弔おうとしたのであろう、と考えられる。

そして阿闍梨が夢を見る場面は次のように始まる。

ある夕暮に、よにむかしのおや／＼のめぐみふか／＼し事どもおもへば、このごろうせ給ひし権大納言の御事のいたわしかりし御有様、残とどまり給ひ、なげきおぼすらんほどなどおもしつゝ、しばしまどろみしに、あてやかなるなをしすがたにて

〔権大納言アラワレル〕

（巻一・一八）

ある夕暮れに阿闍梨が考えていたのは「むかしのおや／＼のめぐみふか／＼し事ども」であった。「むかしのおや／＼」とあるので、後に物語中に引用される「元とく秀」（元徳秀の故事・『唐書』や「良医」（『法華経』）の故事を思い浮かべていたのではないかと考えられる。が、その中に、まずは一番身近で忘れたことのない、亡くなった自身の母を思い浮かべていたはずである。そして、近頃死んだ権大納言のことを思い出す。さらに「残とどまり給ひ、なげきおぼすらんほど」を思う。権大納言が死んで、あとに残され悲しむ人とは誰だろうか。もちろん権大納言の父母は相当のショックを受けていたけれども、阿闍梨の身近でいつまでも悲しんで涙を流していたのは、阿闍梨の養母すなわち権大納言の乳母であった。阿闍梨はこの養母を大切にしている。巻物を読み終えたその時も、同じ屋敷内に養母がいて、彼女に巻物を見つけられないように気を遣って

いる。乳母は、権大納言の死後、尼となり、阿闍梨がひきとつていたのであった。

権大納言の夢を見る前、阿闍梨は、権大納言を失って、息子を失った母親のように悲しむ養母の姿に、自分の母を思い合わせ、親というものに思いを馳せていたのである。一方、権大納言が夢にあらわれたのは親としての願いを託すためでもあった。その時、権大納言の心と阿闍梨の心とは共鳴し、そこに「夢の通ひ路」を成立させたのであろう。阿闍梨が「吉野」という地で、母を思い続けていたことは、権大納言が夢にあらわれた理由の一つであると考える。

次に、「ふりたるみかどの御さゝぎ」の主である帝について、まず、これが誰をさすのか考えてみたい。この物語において、はっきりその存在が知られる帝は三人いる。福武書店本の系図の呼称で言えは、先帝、院、帝（今上帝）ということになる。帝を指す呼称は他に「過給ひし帝」「かの山の帝」がある。この二つの呼称は、権大納言が院より賜った笛の由来に関わる。第十二年春、権大納言は院の御前で仰せにより笛を吹く。そして院より伝来の笛を賜わる。持ち帰ったその笛を母に見せると、母はその由来のように語る。

これは、過給ひしみかどの「いと有がたき音ぞや」と、丸などにものたまひし三つのうちのひとつなり。（巻五・四五五）

この笛は、第十六年、宮中の宴で再び権大納言によって演奏され、その時には次のような紹介がある。

さるは、かの山のみかどの御つたへなりけり。

(巻五・五四一)

大宮が由来を知り、院が所持していたことから考えるに、この呼称は、大宮と院の父である先帝を指す可能性が高いと思われる。先帝崩御の記事は巻物の内容のはじめに語られる。

二の宮〔院〕、春宮にさだまり給ひ、ほどなく父みかどほうじさせ給ひしかば、御代をおさめさせ給ふに、万あまねふしてうるわしゆふものし給ひければ、かみつかたはさら也、及ぬ下がしもまでも、ありがたき御心ざしをおもひつゝ、よにおさまれる日のもとの御さかへ、今ひとしほにあふぎ奉る。

(巻一・二二)

これを見ると、存命中に帝位を退くことはなかったようである。「山のみかど」とあるのが、たとえば出家して山で修行したことなどによる呼称だとすれば、先帝ではなく、その一代前の帝である可能性もある。が、それが「過給ひし帝」と同一人物であるのは確かであり、大宮がそばで話を聞いたりしているのだから、先帝と考えておくのが穏当であろう。それと、「ふりたるみかどの御さゝぎ」の帝とも同一人と見て、差し支えあるまい。

さて、権大納言が賜つた笛の行く先は、物語の最終部分で明らかになる。

兵部卿のみこ〔三ノ宮〕は、かの〔権大納言ガ〕吹ならわし給

る御笛はこの宮〔女二ノ宮〕にこそ有らめと恋しう思すに、いかなる折にか、御前の御遊に、人々／＼笛・琴つかうまつり給ひしに、中つかさのみこ、「院よりの御つたへの笛は、もし、春宮の女御にや御覽せし」と、のたまふ事有て、内より出し給へるを、みこは、「つかうまつるべき人に仰もや」とそうし給へば、春宮は、兵部卿のみこの御笛の音、なつかしき声にきゞ給ひしかば、そゝのかし給ふを、うれしうもかなしうも給りつゝ哀に吹すさみ給ひ、「三ノ宮」しばらくあづかり奉らばや」とけみし給へば、「こよなくめづる人有を」とのたまはせて、あづけ給へば、誠に嬉しうおぼして、まかで給ぬ。

(巻六・七九五)

権大納言の笛は、正妻女二の宮のもとにあった。その娘はこの時点で春宮女御となっている。宴の席で、中務の宮の提案によって、かの伝来の笛が持ち出された。中務の宮は、その笛を吹くにふさわしい人に仰せを賜わりたい、と言う。春宮は、故権大納言の甥に当たり、権大納言を笛の師として慕っていた。その春宮は、三の宮の笛の音が故権大納言の笛の音に通うことに気づいていたので、三の宮に笛を吹くよう勧める。三の宮はその笛を吹き、しばらく預かりたいと願ひ出て、その願ひが聞き届けられた、というのである。

中務の宮や春宮などが出生の秘密を知るはずはないから、この展開は偶然のことなのであろうが、それにしても、結果的に、権大納

言の笛は実の子に渡ったのであった。

三の宮は巻物をひもとき、自分の出生の秘密を知った。出家を願うが、阿闍梨に諫められ諦める。元服後、兵部卿のみことと呼ばれ、中務の宮の二の君と結婚した。物語が語るのはここまでである。が、おそらく、彼は父からの伝来の笛を得て、帝位継承と関わらないところで生きていったことであろう、と想像される。

権大納言の父としての願いは、この笛を伝えるところに至って、本当に達成されたのではなからうか。ちようと、柏木がそうであったように。

阿闍梨がその笛を伝えた先帝の墓に仕えていた、というのは阿闍梨の意志に関わらないことであつたかもしれない。が、物語の冒頭にそのことを書いておいたのは、最終的に笛という父子の絆を確認させるための準備だったと考えることもできそうである。そう考えると、冒頭の一文も、重要な役割を担う阿闍梨の設定として計算されたものだったと言えるのではないだろうか。

ところで、以上述べてきたことだけでは説明しきれない問題が残る。巻物の中には権大納言に関わる話（権大納言系物語）とは別に、かざしの君という姫君に関わる話（かざしの君系物語）も大きな位置を占めており、これについても巻物の外に後日談がある。本作品の中に大きく二つの物語系があり、それらは、主と副の関係ではなく、同列に扱うことができ、しかも互いに関わりを持ちながら進行

していることについては既に述べたことがある。これまで述べたことは、権大納言系物語における阿闍梨の役割とは深く関わるけれども、かざしの君系物語とは関わらない。物語のなかに直接阿闍梨と関わらない物語系を含んでいることについても説明が必要であろう。

#### 四 阿闍梨の父母の恋愛の様相

「序」に描かれた阿闍梨の出家に至る経緯には、阿闍梨の父母の恋愛に多く筆がつけやされている。それは、吉野という地に育った身分いやすい女と、ある日偶然吉野を訪れた男との恋である。その幕開けは、この時代の悲恋物語にありがちな設定であり、しかも、その後の展開にも、同じ時代の悲恋物語の要素が認められることに注目しなければならない。

鎌倉時代の悲恋物語の傾向を論ずるには、一々の作品を広く見渡した上での検討を要するが、いまはその余裕がない。そこで、代表的な物語展開として、いわゆる「しのびね型」の悲恋物語の展開を私にまとめてみた。

- 一、男は薄幸の姫君を見出し二人は恋愛関係になる。
- 二、やがて子どもが誕生する。子は父方に帰属する。
- 三、女は迫害を受ける。（恋愛の障害）
- 四、女は入内し帝の寵愛を得る。
- 五、女を失った男は悲嘆にくれ出家する、または死ぬ。

貴公子と名もない女との身分違いの恋、という設定は、この時代の悲恋物語の語り起こしとして常套的なものであったと考えられる。また、阿闍梨の父母の恋愛記事に描かれた、男が正妻を迎え、訪れもままならないという設定や、女には子が生まれるが顧みられないという設定は、二人の恋愛の障害として常套的なものである。つまり、阿闍梨の父母の恋愛物語の展開は、鎌倉時代の悲恋物語の傾向に従ったものと読めるのである。ただし、はじまりは常套的でも、二人の恋愛物語は女が救われることなく、子も男の家に引き取られないまま終わる。いかにもありがちな物語のように語り起こされるが、阿闍梨の父母の恋愛物語は読者の予想を裏切って、女にとっては救いようもなく暗く幕を閉じるのである。

常套的に語り起こし、異なる方向へ物語を進める、というこのことはこの物語の本筋である権大納言と梅壺女御との恋愛物語、かざしの君と岩田中将との恋愛物語とも共通項を持つ。

権大納言系物語も悲恋物語である。男が恋した女はやがて帝の妃となる。二人は別れざるを得ないが、帝妃となった女は男の胤を宿していた。『源氏物語』に描かれた光源氏と藤壺女御との禁忌の恋をモチーフにして、基本的には鎌倉時代の物語の傾向に従いつつも、結末に大きな違いを見せている。子が男の家に帰属することはなく、女は出家の道をたどった。

かざしの君系物語は、概ね、いわゆる継子物語として読まれてい

結 末	子の行方	恋の障害		
女の死 子の出家	女のもとで成長 出家願望を持つ	男の結婚	吉野の里の女と 都の男との恋	阿闍梨の父母の恋愛物語
男の死・女の出家 子の幸福	皇子として成長 出家願望を持つ	男の結婚 女の入内	男と女の恋	権大納言系物語
男の帰京 女・子の幸福	女のもとで成長	男の流罪 女への継子いじめ	いじめられる女と それを救う男の恋	かざしの君系物語

るが、これもまた悲恋物語の要素を少なからず持っている。結果として男と女が結ばれるとはいえ、従来の継子いじめの物語と比較すると、かざしの君に襲いかかる不幸は二度にわたっており、単純に不幸から幸福へと転じているわけではない。女は、いじめという不幸からは貴公子岩田中将という男の出現によって救われるが、続いて、その男に女御に恋したという疑いが懸けられ男は流罪の刑に処せられる。男と引き離された女へ継子いじめという迫害は続き、宇治で貧困生活を強いられることになった女のもとで子は成長する。

この二度目の不幸には、権大納言系物語との類似点も見出せる。

男にかかる嫌疑が女御に恋した罪であるという点である。二つの物語系は、一見、まるで異なる物語展開のように見えるが、岩田中将が藤壺女御宛の文を落としたために（実際は兄の岩田大納言がしたこと）岩田中将は無実であるが）最愛の妻子と別れなければならなかったことと、権大納言が三の君宛の文を落としたために母大宮の訓戒を受け、おのずから三の君への訪れをひかえるよりほかなかつたということとを並べてみると、まるで無関係とは思われない。かざしの君系物語は継子物語のようにはじめが、その物語展開には十分悲恋物語としての要素を持っているわけである。

阿闍梨の父母の恋愛物語、権大納言系物語、かざしの君系物語、

という三つの物語をその展開に沿って並べてみると、前頁の図のようになる。三つの恋愛物語は結末に大きな違いがあるものの、そこ

へ至る過程には共通項がある。そのことから、阿闍梨の父母の恋愛の様相は、一つの悲恋物語の典型として、これから始まる二つの恋愛物語を暗示していた、と読めるのではあるまいか。

## 五 「序」としての「序」の意義

「序」は、一見、権大納言系物語の幕開けとして巻物を読む設定作りのために書かれているように見える。が、それはおもてむぎの役割で、実際は、権大納言系・かざしの君系という二つの物語系の幕開けとして、悲恋物語の典型を示したものであったのではないか。まさに物語の「序」（プロローグ）としての役割を認めることができると考える。

これまで、「序」の意義が明確にされないでいたのは、「序」の役割を「夢に巻物を託される」という一点のみに認めてきたからにはかならない。しかし、ここで、改めて、「序」全体の文章に、物語の「序」としての役割が読み取れることになれば、この八丁はまさに『夢の通ひ路物語』の「序」と言っているであろう。

先に、阿闍梨の父母の恋愛を女が救われない物語であると述べた。そして、権大納言系物語にも、かざしの君系物語にもその展開に共通項があると。

しかし、この本筋の物語は、悲恋物語としての要素を持ちつつも、結末は異なる。権大納言系物語の結末は、男が死に、女が出家する

というものであった。が、視点を少し変えれば、男は何の罪を犯すこともなく、しかも夢にあらわれるという方法を用いて自分の意思をしっかりと我が子に伝えることができ、女は自分の意志で出家という道を選んでいる。この出家は、それまで周囲の人間の勧めのままに行動していた女が、はじめて自ら選んだ道であった。二人が結ばれることこそなかったが、二人はそれぞれの形で、自分の意志を貫いているのである。一方、かざしの君系物語は名実ともにハッピーエンドを迎えた。二人は結ばれ、右大臣家の庇護のもとに、幸福な将来が約束されている。

悲恋物語はこの時代に多く作られた。多くの物語を生み出した作者たちは、『源氏物語』をどう取り込み、どう乗り越えるかに、工夫を凝らしたに違いない。そこに作者の技量が問われたことであろう。『夢の通ひ路物語』の作者は、物語の幕開けに一つの不幸な恋愛を描いた。そして、そこに描かれた物語に重なるような形で、物語を進ませつつも、結果として救われる物語へと導いていったのである。

もちろん「序」は物語全体から見ればわずかな分量である。しかし、物語の中にちりばめられている小さな挿話（巻一の恋愛体験談に描かれるそれぞれの物語など）が、不幸な恋愛を描いていることを考え合わせるとき、「序」としての機能を失わせることなく、読者が「序」を忘れないような配慮をしつつ、物語を書き進めている

作者の計算のほどが窺える。主筋の物語との類似点を用意して書かれた「序」は読者にある種の不安感なり、この先どうなるかという期待感なりを与え、飽きさせずに読ませる工夫の一だったとも考えられようが、それ以上に、そういう「序」の機能を持つ恋愛物語を描いたことそのものがこの物語の新しさと言ってもよいと思う。

「序」が悲恋物語である以上、その結果残された子が、巻物をひもとく阿闍梨であったというのは決して偶然ではない。ひもとかれた巻物に書かれていたのも悲恋物語であり、しかも阿闍梨は傍観者ではいられない。子に出生の秘密を告げたのも、また、女を出家させたのも彼であった。つまり、阿闍梨は、巻物を受け取ったために、一つの悲恋の収拾役ともいうべき役割を負うことになったのである。これは、阿闍梨が、巻物を託した主人公権大納言の友人だったというこのみに起因するわけではなく、阿闍梨自身が、悲恋物語の男と女との間に生まれた子であったからであろう。

## おわりに

『夢の通ひ路物語』の「序」は、形の上だけでなく、内容も伴って物語の「序」としての機能を担っている。そこに描かれた阿闍梨の生い立ちを中心とする記事は、本筋の悲恋物語を引き出す役割を持つとともに、巻物の読み手である阿闍梨に一個人の人格を与えるものであった。悲恋物語の男と女との間に生まれた阿闍梨は、権大納

言を夢に見た。彼は、恋を失って死んだ男・権大納言に代わって父の願いを子に伝え、救われなかった母に代わって、梅壺女御を出家という救いへ導いた。吉野の阿闍梨は、そういう人物として設定されているのである。従来、夢に巻物を託される設定のみに目を向けた評価に加えて、「序」の記事全体に存在意義を認め、こうした「序」を置いたことについても、この物語の新しさだと評価したい。

最後に課題を述べて本稿を結びたい。「序」の記事には、なお詳しく検討すべき解釈上の問題がいくつか残されている。たとえば、阿闍梨の上京を助けた「やなぎの宿」の人とは何者なのか。「やなぎの宿」は何を意味するのか。「世の中をいとはでくらす人もがな」と願った権大納言の乳母が阿闍梨を養子にしたのはなぜなのか。物語全体についても言えることであるが、今後地道な注釈的研究を深める必要を感じる。

### 〔付記〕

本稿は平成六年十一月十九日広島大学国語国文学会秋季研究会集いで同題にて口頭発表したものをもとめたものである。席上、貴重な御意見を賜りました位藤邦生先生、妹尾好信先生、西本寮子氏に謹んでお礼申し上げます。

### 〔注〕

- 1 大槻修氏「平安後期・鎌倉時代物語の多様性——起筆法・冒頭文の展開について（二）」『甲南国文』第二四号（昭52・3）『中世王朝物語の研究』（世界思想社 平5）に所収
- 2 塩田公子氏「夢の通ひ路物語」年立再考——序相当部分をめぐって——『岐阜女子大学紀要』六号（昭52・12）
- 3 本文引用は、古典研究会叢書『夢の通ひ路物語』（汲古書院 昭47・10）により、引用箇所を巻数と頁数とで示した。なお、かなの清濁・句読点・引用符等は私に付した。また、文脈の理解の便宜をはかり、適宜（ ）の中に主語などを補った。
- 4 工藤進思郎・伊奈あつ子・川嶋春枝・高見沢映子氏編『夢の通ひ路物語』（福武書店 昭50・3）
- 5 『岐阜女子大学国文学会誌』第二十二集 平5
- 6 物語年次は塩田公子氏「『夢の通ひ路物語』の年立と脱落に関して」『名古屋大学国語国文学』第三八号（昭51・6）に従う。なお、物語年次・年立についての私見は、拙稿「『夢の通ひ路物語』の年立について」『国語の研究』第一七号（平4・10）に示した。
- 7 拙稿「『夢の通ひ路物語』の構想に関わる二視点——『権大納言系物語』と『かざしの君系物語』の融合度——」『国語の研究』第一九号（平5・9）

——あんどろ・ゆりこ、本学大学院博士課程後期在学中——